

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 劔 持 淑   |
| 授与した学位  | 博 士   |
| 専攻分野の名称 | 文 学   |
| 学位授与番号  | 博甲第2032号  |
| 学位授与の日付 | 平成12年 3月25日   |
| 学位授与の要件 | 文化科学研究科人間社会文化学専攻<br>(学位規則第4条第1項該当)  |
| 学位論文題目  | Moral Dilemmas of the Edwardian Middle Classes in<br>E. M. Forster's Novels<br>(E. M. フォースターの小説におけるエドワード朝中産階級のモラル・ジレンマ) |
| 論文審査委員  | 教授 古川 隆夫 教授 西前 孝<br>助教授 寺岡 孝憲 助教授 永瀬 春男<br>獨協大学外国語学部教授 富士川 和男   |

#### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英国の作家 E. M. フォースター (1879-1970) の小説6編、『天使も踏むを恐れるところ』(1905)、『いと長き旅路』(1907)、『眺めのいい部屋』(1908)、『ハワーズ・エンド』(1910)、『インドへの道』(1924)、および『モリス』(1971)について、20世紀初頭の変動する社会の中で、様々に揺れ動く英国中産階級の主人公たちの生き方を綿密に分析し、仔細に考察することによって、彼らが社会よりも個人を優先させる価値観を目指しつつも、それが如何に困難であったかを、論証した論文である。

個人主義者で自由主義者であることを自認する作家が、個人の尊厳と良心の神聖さを尊重する立場を明らかにし、20世紀初頭の産業主義と帝国主義の時代に、個人の自由を脅かし服従を強いるものへの異義を唱えていること、対立する主張を和解させたいと願いながらも、個人の不安定な生の営みを描くしかない作家のジレンマが論究されている。

本論文は、上述した概略を含む序論、第1章から第5章、結論、引用文献、それに現地調査時に収集された適切なイラストレーション 23 頁分を含めると、270 枚に及ぶ重厚な英語による論文となっている。

序論では、論文全体の要旨とともに、ヴィクトリア朝の終わりに生まれ、高等教育を受けた作家の人生と作品との関連が論じられ、また当作家と作品に関する先行研究の動向がまとめられ、それらを踏まえた上での本論文の目指す視点と独自性が述べられている。

第1章では、女性の権利が主張され、婦人参政権運動が起こり、「新しい女性」が登場した時代の英国中産階級の女性問題が、『天使も踏むを恐れるところ』、『眺めのいい部屋』それに『ハワーズ・エンド』の中の女性像からとらえられている。作品に登場する女性は5つのタイプに分けられ、彼らの役割や地位が検討される。男性中心の社会に生きる

多くの女性たちは社会の慣習を疑うことはない。社会的な制約のもとで現在の地位に不満を抱く者にとっては、自立し自己実現を果たすことが困難な時代である。伝統的な女性観から女性問題が考察され、また女性解放に共感的な態度を示しながらも、若い世代が直面する課題が探究されている。

第2章では、まず『いと長き旅路』について、同性愛の禁忌の問題をエディプスのモチーフの視点と、主人公リッキー・エリオットの倫理観の観点から考察されている。次に、当時同性愛が英国の法律で犯罪とされていたことからウォルフェンデン報告と『モリス』が論じられる。この小説は、同性愛を敵視する因習に対する挑戦であり、感情や本性に正直に生きたいという願望の書であり、思い上がり・中産階級の因習的な道徳観・俗物的な階級意識に対する糾弾の書でもある。モリスは永続する人間関係を築くために、これらを克服しなければならないと解釈されている。

第3章は『ハワーズ・エンド』における貧しい下層中産階級と裕福な上層中産階級、すなわち、文化や教養に憧れるレナード・バスト、物質主義と産業主義と帝国主義を体現する実業家ヘンリー・ウィルコックス、個人主義と自由主義を体現する知識人でお金の重要性をも認めるマーガレット・シュレーゲル、こうした主要人物の生き方が丹念に分析され、綿密に考察されている。そしてマーガレットとヘンリーの結婚は、実業家が作り出した富に頼っている知識階級として描かれており、そこにはそうした価値観は認め難い作家の複雑なジレンマが反映している、と主張されている。

第4章は『天使も踏むを恐れるところ』を扱い、英国中産階級のイタリア文化への憧れと、現代イタリア人に対する高慢で偏見に満ちた態度が考察されている。自国の経済力の優位性を疑わない英国人はイタリア人を劣っていると見なし、本能的で自然な行動をとるイタリアの青年ジーノ・カレラを、まるで「高貴なる野蛮人」であるかのように、生意気で貪欲で洗練されていないと見なす。イギリスからやって来たアボット嬢とフィリップは生き生きとしたイタリアの魅力に感化され、精神的に成長するが、新しい生活を始めるほどには十分とは言えないことが考察されている。

第5章では、英国の支配下にあるインドの町を舞台にした『インドへの道』における在印英国人とインド人の言説が、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」の観点から考察される。支配者と被支配者は真の人間関係を構築できるか否かという問題とともに、個人対社会の緊張関係の中で個人が己の信念を貫いて生きることができるか否かを問う作品として読み解かれている。インド人医師アジズの裁判の際に、主人公フィールディングはアジズの無実を信じてひとりインド人の側につくが、やがて悪意ある噂話をアジズが劣等感ゆえに信じたために、二人の友情に影がさす。最後に、二つの民族に和解の可能性があるとすれば、未来の子供たちに託されていることが推論されている。

結論では『インドへの道』の結末を受けて、現代社会は個人に対しては不寛容であり、個性や個人的感情を考慮しない非情な価値観を個人に押しつけがちであり、社会と個人の

間には厳しい対立があること、そのような社会の中で自己実現を遂げるためには各人に真摯な努力が要求されること、そしてそのような生きにくい社会と時代であっても、個性と人間尊重の価値観をもって対話を続けることにより、民族的・宗教的対立のある部分は将来避けられるかもしれないことが指摘されている。少数者も自己実現が可能であり、個性を尊重しうる寛容で成熟した社会になるためには、まず社会の構成員である個人が変わらねばならず、そのためには子供たちや若者が偏見のない豊かな人間性を培うことが肝要であることから、教育の重要性を論者は指摘している。

#### 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2000年 2月 8日、学内審査委員 4名・招聘審査委員 1名によって行われた。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、E.M. フォースターの6編の小説を対象に、20世紀初頭の英国中産階級の価値観の揺れを研究しようとするものである。主人公の心の揺れと葛藤を綿密仔細に考察することによって、作家自身が如何に誠実に自己実現を目指しても、それが如何に困難なものであったかを、論証した論文である。

従来論点のはっきりしない作家と見なされてきたフォースターの小説において、中産階級の価値観の揺れとジレンマという微妙で難解なテーマを、フェミニズム、同性愛、中産階級内部の階級差別意識、異文化・異民族間の差別意識といった重要な観点から、網羅的かつ統一的に構築した本研究は斬新である。その分析は緻密であり、分かりやすく丁寧に論述されており、当該研究分野の発展に大きく寄与するものと評価される。

本研究は、十数年にわたる周到な資料収集と調査により、その成果である十数編のフォースターに関する単著論文が基盤となっているが、これらの中には2年間の海外現地調査により、現実の風土と作品世界との照応関係を踏まえた論考も含まれている。これらの論述には誠意があり、説得力がある。

以上のような積極的な評価が基本であったが、次のような問題点も指摘された。

作家自身の小説論をもっと活用すべきである。歴史的・社会的考察に力点が置かれているところでは、作品の分析がやや少ない。作家自身の問題、当時の社会の問題、登場人物の問題という3つのレベルが混在しているのではないか。

最初の点については、そのようにも言えるし、当研究の切込みの観点からすれば、そうとも言えない面もあるだろう。第2の点については、止む得ない面かもしれない。最後の点は、文学作品を研究する場合常に問題となる重要な指摘であり、この作家のように「曖昧さ」が特色であるような作品を対象とする場合、そうした嫌いがあるかもしれない。同性愛を扱った自伝的な小説『モリス』は1910-12年に書かれ、作家の死後の翌年、1971年に出版されたという経緯を見ただけでも、3者のレベルの混在がいかに複雑なものであるかがわかる。このことは時代の推移とともにその解釈が変わりうるし、今後に残される研

究課題でもあろう。

こうしたいくつかの問題点を含みながらも、本研究の成果を損なうものではないことが確認された。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。